

## 0、初めに

この考察に書かれていることはほとんどが筆者の独断と偏見であり、事実とは大きくことなる可能性が多々あります。これによって不利益、損害、精神疾患、錯乱、二日酔い等といったことが生じても筆者は全く責任を取りません。あらかじめご了承ください。

## 1、動機

昔、自分が好きなゲームの技に義隣聖霊斬という技があったのだが、当時の自分はその技をとて格好がいい技だと思っていた。しかし、現在になってみるとただ変な仮面の男が念仏をぶつぶつ唱えながら剣を振り回すようにしか見えなかったのである。そのゲームにはまった当時からまだ5,6年しかたっていないのにこれほどに自分は変わってしまったのかとひどく驚いた。

よって私はどうしてこんな技を当時の私がかっこいいと思ったのか、今の私の目には格好悪くうつるのか、その点を考察すべくこの議題を選んだ。

## 2、目的

この考察を通じて、なにが中二病でなにがそうでないかを分ける線引きをすると共に、これから作る製作物が黒歴史にならないように自分の中にいまだ存在する中二病である部分の自覚を促すことである。

## 3、導入

そもそも中二病とは何なのであるのか、フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』によると以下のように定義されている

(以下引用)

**中二病**(ちゅうにびょう)とは、**思春期**の少年にありがちな[要出典]、「微妙にずれた自意識過剰やコンプレックス」、それから転じて起こる数々の「日本の教育制度における**中学2年生**(14歳、**ティーンエイジャー**)くらいの年代にありがちな言動」を**小児病**に引っ掛けて揶揄したもの。**伊集院光**がラジオ番組『**伊集院光 深夜の馬鹿力**』の中で用いたのが最初とされる。「病」という表現を含むが、実際に治療の必要とされる医学的な意味での「**病気**」または「**精神疾患**」ではない。

(引用終了)

具体例として、自分が特別な存在であると思い込む(前世は異界の戦士、ピンチになると第二の人格が覚醒する、等)ことが挙げられる。実際、筆者も普段は温厚であるが、自分の命が危なくなると、凶暴な第三の人格が…(あまりにも痛い内容のため、省略されました)さらに、自分の中だけでは飽き足らず、自分が特別であることを周囲に言い始めたらもう手遅れである。

中二病に罹患したものは、周囲の人々からは白い目で見られる、もしくはいじめの対象になることが多いと考えられている。

## 4、考察

中二病とは、正式な病気ではないため明確な定義があるわけではない。本考察では、昔の自分を思い出すと、痛すぎて死にたくなると思えるようになった時、自分は中二病だったと定義する。これを踏まえて具体例を考察してみる。とても痛い設定であるが、我慢して読んでもらえると幸いである

ここにある中学二年生くらいの少年がいたとする。その少年は自分のことを異界の魔王によって人間を殲滅するために作られた命を持つ剣が人間界に転生したものであると思い込んでいる。この時点では考察の定義によっては彼は中二病であるといえない。自覚がないからだ。

いかに彼が周りからなじられ、白い目で見られ、いじめられても彼は自分が転生者で思っている限り、転生者としての自我を保つことができる。彼にとってそれは凡人の戯言であり、自分を真に理解しているものはいないと自覚しているからだ。

しかし、彼に転機が訪れる。3年生になって受験をしなければならなくなったのだ。彼は自分の中では転生者であると思っているわけだからそんなものをする必要はない、しかし周りの生徒は次々と受験モードに入っていく。仕方なく彼は受験勉強をする。

その中で彼は気づいた、自分は別に特別な人ではないことに、周りの人々と同じであることに。そこから彼は精一杯受験勉強をし、なんとか高校に入ることができた。そこで彼は中学時代、元クラスメイトであった人と再会する。このとき元クラスメイトは彼のことを話題にするであろう。ここで彼はその話を聞きながら当時を思い出す。このとき注目すべきところは彼はもう転生者としての自覚を失っていることである。凡人である彼は当時受けたいじめ、なじり、また白い目で見られたことを思い出す。ここで彼は初めて自分が中二病であったことを自覚するのである。

これより、中二病とは他人と違うものでありたいという考えが、自分がみんなと同じであるという考えに変わってこそ、初めてかかっていたことに気づいたことになるだろう。

## 5、まとめ

中二病は自分の限界がわからず、常に他人とは違っていたいという思いから生じたものであることがわかったような気がする。目的である自分に残る中二病とは、いまだ自分を特別であると勘違いしている気持ちであるだろう。しかしあえて自分はこの感情を残し一生付き合っていたいと思う。なぜならそれをすべて失うと自分でなくなってしまいそうだからだ。せつかく大学まで付き合ってくれた中二病なのだから人生の最後までつきあいたいと思う。最後にあなたの中に中二病がもしも残っていたら、すこしだけ残しておく、なんかいいことがあるかもしれないと思われるような気がします。

## 6、参考文献

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%AD%E4%BA%8C%E7%97%85>